

目的 われわれは、これまでにヒトの食味嗜好傾向を性別及び幼児期から老年期までの年齢層別に分けて調査し報告して来た。前報では、老年者特に特別養護老人ホーム在園者に焦点をあて在宅老人を加えて老化に伴う甘味覚閾値、塩味覚閾値及び嗜好の傾向を促えた。今回は酸味覚閾値及び酸味嗜好の調査を実施し、解析した結果若干の知見を得たので甘味・塩味を加えた3味での総合的な考察を試みた。方法 在宅老人男子181名女子181名、特別養護老人ホーム在園者男子37名女子63名の計442名、対照群として青春期女子短大生100名にそれぞれ質問紙法を用いて甘・酸・塩味品の各6品目ずつに基づく5段階評価による嗜好調査を行った。また特別養護老人ホーム在園者、女子短大生にクエン酸を呈味試料液とし、パネル各人に対し酸味に於ける感受下限閾値を検査した。結果 1)酸味閾値検査ではホーム在園者は高濃度での判別が見られた。すなわち青春期女子が0.01~0.07%で弁別可能なのに対し、ホーム在園者では男子0.01~0.03%クエン酸液での判別者が0であり、また男子70%、女子54%の判定不能者が認められた。そのためクエン酸液の濃度を高めた結果、0.02%試料液で男子20%、女子43%が弁別可能となった。2)パネルの主な嗜好傾向を年代別、性別、環境別に甘味嗜好群と酸味嗜好群に分類したところ、60代在宅老人男子が酸/甘比1.13と、青春期女子短大生が1.03と酸味嗜好性を示した。3)老年者は青春期女子短大生に比し、甘・酸・塩味いずれにも感受閾値に対してホーム在園者は鈍化傾向を見せた。その中で甘味ではパネル全員が総じて高濃度での判別覚を示すのに比べて、塩味では低濃度の判別者が存在し鈍化度はゆるやかであり、酸味はその中間の結果を示した。